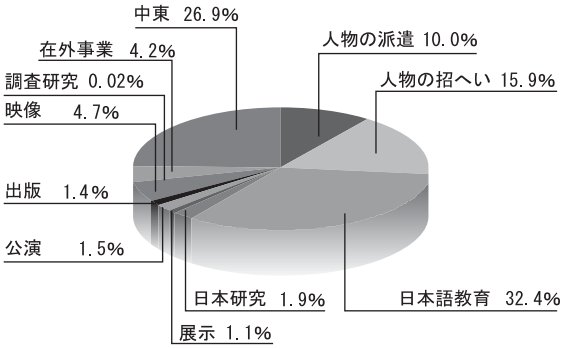
中近東・北アフリカ

概　要



事業費合計
4億9,500万円

2003年度に対中近東・北アフリカ向け事業に充当された事業費は４億9,500万円で前年度と比べ約１億4,000万円増となった。

全実績額のほぼ３分の１を占めるのは日本語に関わる事業(33.2%)で、次いで人物交流(26.9%)の２分野において全事業額の６割に達する。

日本文化紹介、芸術交流分野においては、『おしん』のイラクとアフガニスタンにおけるテレビ放送、『すずらん』のエジプトとシリアにおけるテレビ放送を行なうことで、親日観を醸成した。また、生け花(アルジェリア、スーダン、バーレーン)、琉球舞踊中東公演(シリア、レバノン、バーレーン)事業を中東諸国を巡回して行ない、好評を博した。出版翻訳分野では、瀬戸内寂聴『源氏物語』、鴨長明『方丈記』のアラビア語翻訳を行ない、日本の古典に対する理解を促す契機となった。

知的交流分野では、対中東地域・文化交流対話ミッションをサウジアラビア、イラン、シリア、エジプトに派遣し、双方の有識者が有意義な意見交換を行ない、相互理解を促し更なる知的交流の場につなげた。また日本語教育分野では、カイロ事務所の日本語教育アドバイザーが、広域的な活動を行ない、地域のネットワーク促進に貢献した。

日本国内では、「イラクを知ろう」「イスラムが問題なのか？　近代化との関係を考える」のテーマで一般の社会人などを対象に中東理解講座を行ない、幅広い年齢層、職種の市民の中東に対する理解を促した。

■ 海外事務所報告

エジプト

カイロ事務所

1．概況

エジプトは、元来中東アフリカ地域の要衝として重要性を持つ国であるが、とくにアラブ世界においては、政治・外交に加えて文化、情報、学術の面でも影響力を有する、地域のリーダーである。イスラムの世界でも、カイロにはスンニ派イスラム教学の最高権威たるアズハル機構が存在し、世界各地からイスラムを学ぶ留学生を受け入れているなど、エジプトは重要な役割を果たしている。

内政面では、ムバラク政権が安定を維持しているが、90年代以降の市場経済化へ向けた経済構造改革で経済は一定の進展を見せたものの、貧富の差や失業問題は解決されず、経済的機会に恵まれない多くの若者には社会への失望や閉塞感が広がっている。そうした社会を背景に、大衆のイスラム回帰現象は、ここ20～30年の間で着実に進んでいる。欧米的な生活文化の物質的要素はさまざまに流入し続けているが、そうした表層の下で、貧しい庶民層や社会の現状に不満を持つ学生・大卒者らの間に、イスラム回帰の心情は根強く広がっている。

経済問題は、2003年の最大の国内問題となった。2003年１月末のエジプト・ポンド切下げに端を発した諸物価の急上昇は、国民生活を圧迫している。

また、2003年11月にはムバラク大統領の健康問題が浮上、前年に大統領の次男が与党の要職に抜擢されたことと絡めて、後継問題がにわかに関心を集めるようになった。

米国とその同盟国による2003年の対イラク武力行使、その後のイラク占領は、エジプト国民の米国への反感を激化させた。イラクをめぐり米国を支持し協力する日本に対しても批判が広がったが、元来親日的なエジプトで市民レベルから公然と日本批判の声が聞かれたのは異例であり、我が国として軽視できないことである。批判には誤解や知識不足に基づいたものも多く、アラブ世界との相互理解と交流の重要性がこれまで以上に高まっている。

2．日本との文化交流事業

30年以上の伝統を有するエジプトの日本語教育は、安定した発展の道を歩んでいる。先駆的存在であるカイロ大学文学部の日本語日本文学科では、2003年、同学科出身の生え抜きのエジプト人教官が初めて正教授に昇任し、正式の学科長となった。1974年に設立されたアラブ地域最初の日本語専攻コースである同学科は、設立後29年を経て自立の過程を完全に終えたといえよう。

一方、外国語教育の名門であるアイン・シャムス大学外国語学部に2000年に開設された日本語学科は、優秀な学生を集め、高い成果が期待されている。

社会科学分野では、カイロ大学政治経済学部アジア研究センターが、日本の外交政策に関する研究プロジェクトとシンポジウム(基金助成対象)を実施した。同学部は当国のエリート学部で、社会的影響力や政策立案者との関係も強く、ここでの現代日本研究を始める動きは注目に値する。

日本文化紹介の分野では、2002年度に続き、2003年度もNHKドラマ『すずらん』のエジプト国営TVでの再放送が地方チャンネルなどで行なわれ、親日感醸成に効果を発揮している。一般エジプト人は、日本に対して、固有の伝統と近代化をうまく共存させている国との好印象を持っているが、日本についての具体的知識は乏しい。とくに現代日本の理解に役立つ文化紹介のニーズは大きい。

3．カイロ事務所の活動

＜活動方針＞

2003年度は、対エジプト事業における重点項目となっている知的交流や社会科学分野の日本研究を促進するため、カイロ大政治経済学部におけるシンポジウムへの協力や、同学部での日本人学者の講義など、新たな働きかけを開始した。また、翻訳出版の促進については調査に基づき新事業の企画立案を行なった。いずれも、次年度以降のための布石であり、中長期的に大きな意義と効果につながるものである。

エジプト国内での日本文化紹介活動では、現代日本の芸術文化活動と伝統文化の両方を紹介し、日本文化の多彩な魅力を伝えるよう努めた。また、これまで事業は首都カイロに集中しがちであったが、エジプト第２の都市であるアレクサンドリアが、県政改革や新文化施設設立により文化面でも活況を呈しているのを受け、2003年度からはアレクサンドリアでの日本文化紹介事業を増加させた。日本語教育分野では、従来に引き続き国内の拠点への支援と、中東地域内の日本語教育関係者ネットワーク化に取り組むとともに、カイロ事務所で行なう日本語教師養成事業を強化するなど、着実な活動を目指した。

＜2003年度事業例＞

- **電子メディア音楽：日本エジプト共同コンサート(2003年６月15日)**

エジプト人の現代作曲家・指揮者のM.アブデル＝ワッハーブ氏と３人の若手日本人現代作曲家が、映像やコンピューター・ミュージックを取り入れた現代音楽作品の新作をそれぞれ作曲し、カイロ交響楽団が演奏する、日本・エジプト両国の音楽家のコラボレーション・プロジェクト。日本側の作曲家として、山本裕之、三輪真弘、宮木朝子の３氏が参加、また、ビデオ・アーティストの兼子昭彦氏も映像制作のため加わった。事務所は、エジプト人作曲家および会場を提供したカイロ・オペラハウスと協力し、本プロジェクトの実行を支えた。

エジプトでは現代音楽は一般にほとんど知られていないジャンルだが、広範な宣伝の結果、コンサートには予想以上の聴衆が来場、後日当地紙にコンサートの様子を紹介する記事が出るなど、日本の現代芸術の先進性、創造性を知ってもらう良い機会となった。

- **アレクサンドリア日本文化週間(2003年２月22日～28日)**

カイロ事務所では、アレクサンドリア芸術センターの協力を得て、同市内において展示会、映画上映、コンサートなどの催しを集めた「日本文化週間」を開催した。一週間の会期中、生け花、日本文化遺産写真パネルおよび民芸品などの展示を行なうとともに、アラビア語字幕付日本映画の上映会を毎晩開催して計６作品を紹介した。また、オープニングの夜には、日本人の率いる「ジャパニーズ・インターナショナル・ウィンド・カルテット」(木管四重奏団)のコンサートが、アレクサンドリアの劇場で行なわれた。

普段日本文化紹介に触れる機会の少なかったアレクサンドリアでは、大きな反響があり、とくに生け花の展示が来場者の関心を集めたほか、日本映画上映会は毎晩立見客や入りきれない来場者が出るほどの人気であった。

アレクサンドリア側の関係者や来場した市民からは、今後も日本文化紹介事業を望む声が多く寄せられ、同市での日本文化紹介におおいに潜在的可能性があることが確認された。

中東日本語教育セミナー

• カイロ大学政治経済学部への客員教授派遣(2003年３月26日～４月２日)

エジプトでは未発達の社会科学分野の日本研究への関心を高めてもらうため、カイロ大学政治経済学部に学者を派遣し、同学部での講義を企画した。同学部は、将来の外交官や研究者、政策官僚を育てるエリート学部である。とくに今回は、イラク問題で日本批判が生まれている状況下で、日本外交への客観的理解を深めて欲しいとの考えから、日米関係史の専門家である神戸大学助教授簑原俊洋氏を派遣した。簑原氏は、カイロ大学での公開講義で、日本外交史の大きな流れを解説するとともに、現在の日米同盟の意味やイラク問題についても質問に答えて、背景説明と率直な意見を披露した。反米気運が強く、中東の紛争問題では感情的な議論の声の大きい現在のエジプトの大学内で、イラクを巡る問題を含めて日米関係の講義を企画するのは勇気のいることであったが、率直かつ熱心に語りかける簑原氏はエジプト側に歓迎され、実りの多い交流事業となった。「率直な議論が聞けて良かった」との感想が多く寄せられ、とくに若い学生達は、講義終了後簑原氏を囲んでなおも話を聞きたがり、同氏の質の高い講義に強い印象と影響を受けたようであった。また、講義の内容は当地の新聞にも概要が掲載された。

カイロ大学アジア研究センターでのシンポジウム